



第5回若手研究者育成会 記録

記念センター 豊田 信介

日時：2009年5月19日（火）12:00～13:00

場所：大学記念館2階 越知研究室

出席者：越知、今泉、大島、田邊、山口、小林、佃、武井、暁、高木、広中、豊田

（+来賓として酒井常任監査役）

（概要）

2009年度に入り2回目となった今回の若手研究者育成会は、上記のオープン・リサーチ・センター（以下、O.R.C.）のメンバーに、来賓としてお越し頂いた愛知大学常任監査役の酒井氏を加えた計13名によって開催された。

今回のテーマは前回（4月21日開催）に引き続き、アメリカ・シカゴでのアジア学会の展示活動に参加されたO.R.C.メンバーによる「帰国報告会」の2回目として、佃・暁・山口の3氏から活動の成果や反省点、現地での見聞等について発表がなされた。佃氏は鉄道を中心とするシカゴの交通事情を、現地で撮影した写真を交えて紹介し、切符の購入方法が複雑で戸惑ったことや、車窓から見えた「我々は1941年（＝真珠湾攻撃の年）と2001年（＝同時多発テロの年）を決して忘れない」という標識からアメリカの歴史認識を垣間見たことなどを報告した。続いて暁氏は、前回発表者の武井氏と同様、「東亜同文書院」の名前を国際的な舞台において宣伝できたことが一番の成果であったとしながらも、他の参加団体が自らの出版物（中国関係の研究書が中心）を多数陳列していたことを挙げ、「我々も愛大発行の刊行物をもっと持っていけばよかった」と反省点も口にした。そして最後に山口氏からは、英文のパンフレット作成に苦勞したことや、史資料の画像を横断幕にプリントして限られた展示スペースに対応したことなど、研究支援課として携わった展示物の準備や現地での設営に関する報告がなされた。山口氏は今回の反省点として「初の海外展示会参加にあたり、“大きな目標”を掲げていなかった」ことを挙げ、また現場に関する情報が極めて不足していたことについて、事前にもう少し“詰め”の部分をしっかりやっておく必要があったとし、今後の課題とした。

発表後、大島客員研究員からアジア学会で発表された研究テーマの傾向や、日本人発表者の数についての質問があり、それについては暁氏が、中国関係では芸術史や言語、仏教関係が多く、一方で政治経済関係は少数であったこと、日本人発表者は2～3人でいずれも中国研究の発表ではなかったと回答した。



羽ばたけ若手研究者たち

2人の博士号取得を祝い、応援団もエール

愛知大学 東亜同文書院大学記念センター(藤田佳久)センター長 藤元彦学長も駆けつけ「若手の成長を見て頼もしい限り。社会のために活躍してほしい」と激励した。

博士の就職難はいまだやまず、2人も非常勤講師で食いつなぐ日々だが、愛大で受けた学風が、いすれ彼らを助ける日が来るに違いない。

先日の会で、今年春に、工学を

取得した石

田卓生さん(36)と 勝敏さん(32)のお祝いがあった。

大島隆雄名誉教授は「博士とは、自立した研究者として認められたということだ」と称賛。佐藤元彦学長も駆けつけ「若手の成長を見て頼もしい限り。社会のために活躍してほしい」と激励した。



TONICHI WEEKLY DIGEST

